



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	身体・動作・空間：中華圏アクション映画に関する研究 [全文の要約]
Author(s)	欧陽, 如一
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16064号
Issue Date	2024-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92955
Type	doctoral thesis
File Information	Ruyi_Ouyang_summary.pdf



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：欧陽如一

学位論文題名

身体・動作・空間

——中華圏アクション映画に関する研究

・本論文の観点と方法

本論文は、中華圏のアクション映画の映画監督、アクション俳優、アクション指導及び彼らによって創作されたアクション映画を研究対象に、「身体」、「動作」、「空間」をキーワードとし、作家・作品論と映画ジャンル論という二つの視点から、中華圏におけるアクション映画を多面的且つ包括的に考察することを目的とする。

中華圏のアクション映画では、映画監督、アクション俳優、そしてアクション指導の関係が非常に密接である。例えば、キン・フー監督はいつもアクション指導の韓英傑とともにアクション場面の動作とシーンのカット割りをデザインし、それをカメラマンや俳優に完成させる。ブルース・リーは彼の最後の二つの作品ではアクション俳優としてだけでなく、アクション指導も務め、自身の身体能力をもとにアクションシーンを設計した。ジャッキー・チェンはさらに、監督、アクション俳優、アクション指導の全ての仕事を引き受け、映像表現とパフォーマンスの二つの意味でのジャッキー映画を創作した。

ゆえに、本論文では、中華圏のアクション映画の作風に基づき、映画監督、アクション俳優、アクション指導が映画スタイルの形成に与える影響を踏まえ、中華圏のアクション映画の歴史的な文脈に従い、キン・フー、ブルース・リー、ジャッキー・チェン、ジョニー・トー、徐浩峰の作品を主要な研究対象として扱い、さらにチャン・チェ、韓英傑、ジョン・ウー、張芸謀、アン・リー、チャーリー・チャップリン、バスター・キートン、ジャック・タチ、ジャン＝ピエール・メルヴィル、ジュールズ・ダッシン、黒澤明などの中華圏または国際的な映画人及び彼らの作品

との比較研究を行うことで、中華圏のアクション映画の全貌を捉える。

上記のアクション映画を研究対象に、本論文では二つの視点から総合的に論じてみたい。一つ目は、作家・作品論の視点である。中華圏のアクション映画の表現方法を構築する重要な一環として、中華圏での最も代表的なアクション映画作家の映画に焦点を当て、それぞれの物語構成、カメラワーク、映像編集、シーンの構成、音響、パフォーマンス指導などの映画創作の要素を分析することで、中華圏のアクション映画が有する芸術的力について考察する。二つ目は、ジャンル論の視点である。武侠映画、カンフー映画、警匪映画などのアクション映画のサブジャンルを、ジャンルの草創期、古典的なジャンルの定着期、ジャンルの修正時期、ジャンルの解消時期という時系列で検討し、異なるアクション映画の作家や異なるアクション映画の間の継承と創造を考察することで、中華圏のアクション映画のジャンル映画としての美学的特徴と歴史的な変遷を明らかにする。

・本論文の内容

本論文は、次のように構成されている。

第1章では、まず、中華圏にアクション映画の歴史を紹介しながら、武侠映画、カンフー映画及び警匪映画が一つの文脈に置かれる妥当性を説明する。そして、アクション映画における「身体」、「動作」、「空間」という三つのキーワードをめぐり、アクション映画に創造的な貢献を与えた映画作家について論じる。

第2章では、1960年代にブームとなった「新派武侠映画」の代表的な監督であるキン・フーの武侠映画について論じる。キン・フーの映画とそれ以前の武侠映画とを比較しながら、「映画表現の開拓者」としてのキン・フーが如何に京劇の伝統に関連する身体性とアクション表現に関わる編集方法で、従来の武侠映画の伝統を変え、新派武侠映画の定番のアクション動作を作り出したのかを考察する。そして、キン・フーの映画における縦方向空間に焦点を当て、彼の映画に現れた身体と空間との創造的な結びつきを明らかにする。

第3章では、1970年代に国際的なカンフースターとなったブルース・リーのカンフー映画について考察を行う。武侠映画がスペクタクル的なアクション表現を求める過程の中で、ブルース・リーはリアルなアクション動作を重視するカンフー映画

を輝かせる。そこで、アクション指導がアクション映画の構成に与えた影響という新たな視点で、ブルース・リーのカンフー映画に表れた身体と映像の関係性を検討する。

第4章では、1980年代にコメディ映画、カンフー映画、警匪映画のジャンルの要素を創造的に融合させたジャッキー・チェンのジャンル・ミックス的なアクション映画を考察する。フィジカルコメディがジャッキー・チェンに与えた影響に焦点を当て、ジャッキー・チェンの代表作である『プロジェクトA』(1983)と『ポリス・ストーリー/香港国際警察』(1985)を分析することで、ジャッキー・チェンが如何に「点」、「線」、「面」のパフォーマンスで身体と都市空間の関係を構築するのかについて論じる。

続いて第5章は、1990年代にフィルム・ノワールの映像スタイルで警匪映画を革新したジョニー・トーを研究対象として扱う。本章では、ジョニー・トー的なスタイルを確立させた『ザ・ミッション 非情の掟』(1999)と『エグザイル/絆』(2006)という二本の映画に焦点を当て、世界映画史の発展に立脚し、ジョニー・トーの撮った作家性と創造性がともに富んでいる「群像アクション映画」について考察する。そして、ジョニー・トーの映画における創造的な「群像」によるアクション配置の特徴を分析することで、ジョニー・トーの群像アクション映画の作風を明らかにする。

第6章で取り上げたのは、2000年代以降に撮られた警匪映画の『PTU』(2003)である。『PTU』は香港ノワールという文脈においての、新たな視点から制作された重要な一作として捉えられ、作品では警匪映画における最も重要な「銃」という記号が解消され、新しい暴力性が生成される。アクション映画の解消される時期に制作された『PTU』を分析することで、2000年代以降のアクション映画の特徴を探求する。

そして第7章では、2010年以降に、現代中国の武侠映画で数少ない映画作家の一人である徐浩峰の作品について考察を行う。デビュー作である『ソード・アイデンティティー』(2011)を顧み、徐浩峰の映画における「武術」に関する音響・映像表現を分析することで、徐浩峰が表現した、それまでの武侠映画とはまったく異なるアクションの演出と美的特徴、およびその「武術＝機械」と呼ぶべき映画装置に関する思考を論じる。

第8章は、急速に発展しているデジタル技術がアクション映画における身体表現

にもたらした新たな可能性を論じる。アクション映画における身体が「生身の肉体」から「デジタル身体」へと変化することがアクション映画の美学的特徴にどのような変化をもたらしたのかを考察することで、身体そのもののアクション映画における位置付けと意義を明らかにする。

最後の第9章では、各章の内容をまとめ、全体的な結論を提示する。